

務の日なれば記録所におはしまして、人のあらしひうれふる事どもをおこなひくらさせ給て、人々もまかで、君醒醐も本殿にまばしうちやすませ給へるに、今夜すでに武士どもきほひ参るべしと、忍びて奏する人ありければ、とりあへず、雲の上を出させ給略。我も人もあきれいたりて、内侍所神璽寶劔ばかりをぞ、忍びてゐてわたらせ給、上はなよらかなる御直衣たてまつり、北の對よりやつれたる女車のさまにてまのび出させ給略。俄に道をかへて奈良の京へぞおもひかせ給、中務の宮良尊も御馬にておひてまゐり給、九條わたりまで御車にて、それより御門もかりの御衣にやつれさせ給て、御馬にたてまつるほど、こはいかにしつる事ぞと夢の心ちしておぼさる。

〔太平記三〕主上御没落笠置事

去程ニ類火東西ヨリ吹覆テ、餘烟皇居ニ懸リケレバ、主上醒醐ヲ始進ラセテ、宮々卿相雲客皆徒跣ナル體ニテ、何クヲ指トモナク足ニ任セテ落行給フ、此人々始一二町ガ程コソ、主上ヲ扶進ラセテ、前後ニ御供ヲモ申サレタリケレ、雨風烈シク道闇ウシテ、敵ノ関聲此彼ニ聞エケレバ、次第ニ別々ニ成テ、後ニハ只藤房季房二人ヨリ外ハ、主上ノ御手ヲ引進ラスル人モナシ略。中兔角シテ夜晝三日ニ、山城多賀郡郡誤ナル有王山ノ麓マデ落サセ給ヒケリ略。中山城國住人深須入道、松井藏人二人ハ、此邊ノ案内者ナリケレバ、山々峯々殘ル處ナク搜ケル間、皇居隱ナク尋出サレサセ給フ略。中俄ノ事ニテ網代ノ輿ダニ無リケレバ、張輿ノ怪シゲナルニ扶載進ラセテ、先南都内山へ入奉ル略。中六波羅北方常葉駿河守範貞三千餘騎ニテ路ヲ警固仕テ、主上ヲ宇治平等院ヘナシ奉ル、其日關東ノ兩大將京ニ入ズシテ、直ニ宇治へ参向テ、龍顔ニ謁シ奉リ、先三種ノ神器ヲ渡シ給ヒテ、持明院新帝光へ進ラスベキ由ヲ奏聞ス、主上藤房ヲ以テ仰出サレケルハ、三種ノ神器ハ、古ヨリ繼體ノ君位ヲ天ニ受サセ給フ時、自ラ是ヲ授ケ奉ル者ナリ、四海ニ威ヲ振フ